シリーズ「ほっかいどう学考」展開の可能性を語る

本誌「開発こうほう」では、2018年２月号から19年10月号まで８回にわたり、「ほっかいどう学考」を連載してきました。当シリーズの取りまとめにあたり、執筆者の中から４人の方にお集まりいただき、座談会形式で北海道の豊かな未来に向けて、ほっかいどう学の現状、今後の展開の可能性などについて、忌憚（きたん）の無い意見を頂戴しました。

出席者のそれぞれが思い描く「ほっかいどう学」のイメージを伺いつつ、「ほっかいどう学」の体系化の可能性と、具体的な展開方策について話し合い、読者により身近に考えてもらうとともに、今後の「ほっかいどう学」の推進に役立てたいと考えています。

出席者（五十音順）

北室　かず子　氏　ノンフィクションライター

新保　元康　氏　NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム理事長、（一社）北海道開発技術センター地域政策研究所参事

関　　秀志　氏　北海道史研究協議会　副会長、（一財）北海道歴史文化財団　評議員

コーディネーター

原　　文宏　氏　（一社）北海道開発技術センター地域政策研究所所長

（本座談会は2019年10月30日に開催しました）

原　「ほっかいどう学」が平成28年に閣議決定された第８期北海道総合開発計画に盛り込まれました。そこを出発点に、令和元年７月にはNPO法人ほっかいどう学推進フォーラムが設立され、推進体制の整備も着々と進んでいるところです。一方で、「ほっかいどう学」は、とても幅広い分野にまたがる領域を対象としているため、つかみどころの無い、“ほわっ”としたイメージが先行している感があります。

そこで「開発こうほう」において「ほっかいどう学考」を執筆いただいた皆様から４人の方にお集まりいただき、議論を通して、さらに「ほっかいどう学」について追求してみたいと考えています。今日の論点は

開拓の歴史や社会基盤整備に関する様々なこと技術的なことを、
分かり易く“翻訳”して広く伝えていくことが、私の使命です。

新保　元康 氏

二つと考えています。一つは、運動論としての「ほっかいどう学」と学問としての「ほっかいどう学」のバランスや立脚点についてです。もう一つは、戦略性をもって取り組んでいくためには、具体的に何を、どうすべきか、という点です。

最初に、「ほっかいどう学」のきっかけをつくられた、新保さんから口火を切っていただけますか。

「ほっかいどう学」とは

新保　この３月まで札幌市内の小学校の校長でした。社会科が専門でしたので、もともと北海道を学ぶことに関心がありました。「総合的な学習」が学校教育に導入されたことがきっかけで、雪や除雪、道路、交通などをテーマに授業実践や教材化に取り組んできました。そのことが、北海道総合開発計画策定に当たって意見を述べる機会を与えられて、「ほっかいどう学」へとつながったと思っています。

私の考える「ほっかいどう学」は、簡単に言えば“北海道を知ること”を推進することです。北海道を知ることは己を知ることにつながります。つまり“自分って何”という、自己認識やアイデンティティの確認は子どもの成長だけでなく、大人にも必要です。

以前は小学校の４年生用に「わたしたちの北海道」という副読本があり、北海道全体のことを教えていましたが、現在は各市町村単位の副読本だけになってしまいました。子どもたちが成長して18歳になり選挙権を得て北海道議会議員を選ぶときに、北海道のことをよく知らないで選んでいいのでしょうか。そんな問題意識も「ほっかいどう学」に取り組む所以（ゆえん）です。

関　小さいころから歴史が好きでしたので、将来は高校の教員になって、教員をやりながら地方史の研究をやろうと思っていました。そして、予定どおり昭和34年に母校の羽幌高校の教員になり、生徒たちと一緒に地方史の研究をはじめました。

専門である歴史の視点から「ほっかいどう学」は、北海道の歴史的な特性を明らかにすることだと思います。ただ、論点であげられましたように「学」としたときには、どんな学問や研究なのかという点は、私も気になっておりました。

学問には基礎的な研究と、原さんは運動論的と言いましたが、私は実践的な研究があると考えています。「ほっかいどう学」は、この両方から組み立てられると考えます。「ほっかいどう学」と似たような取組として全国各地に「東北学」等の地域学がありますが、実践的な研究につなげるところが、他の地域学より一歩踏みだしており、大きく異なる点だと思います。基礎的な諸学の成果を元に、それらを総合的、学際的に展開して、地域特性を生かした将来の地域づくりへとつなげる実践的な研究が「ほっかいどう学」ではないでしょうか。

また、先ほど新保さんも憂慮されておられましたが、私も、いま若い世代に北海道のことを理解する教育が不足していると思います。このような状況を改善するためにも、「ほっかいどう学」が大きなきっかけとなることを期待しています。

近代という隠れた岩盤を知る

北室　私は、お二人とは違って北海道で生まれ育ったわけではありません。18歳までは徳島県で、その後筑波や東京にいて、28歳から北海道に住むようになり、おもにJR北海道さんの車内誌の特集を書かせていただいてまいりました。

取材を通して北海道を知ると、北海道には近代*1以降が凝縮していることがわかってきて、とても面白いと思うようになりました。歴史を勉強したわけではない素人でお恥ずかしいのですが、北海道は、“ここか

＊１　近代
日本においては、一般的に明治維新（1868年）～太平洋戦争の終わり（1945年）までを指す。

北室　かず子 氏

自然と人が融合する北海道という沃野で、負の側面も含めた近代の物語を語りつぎ共有していくことが、地域の誇りにつながるのではないでしょうか。

らは近代”という境界がはっきりと見える感じがします。

もう一つ、大学でフランス哲学を専攻したのですが、取材で「博物館網走監獄」に行ってみたら、パノプティコン*2があって、とても驚きました。中央に見張り台があって放射状に囚人を監視するシステムは、フランス人哲学者ミッシェル・フーコーが、これこそが近代の思想だと言った刑罰の仕組みの基本です。そういう網走刑務所のような驚きと発見が沢山ある北海道を、紙面で皆さんと共有したいと思いました。

石狩川流域は今や日本屈指の米どころとなりましたが、もとは氾濫にさらされる泥炭地でした。明治以降、治水によって水害を防ぎ、北海幹線用水路などによって農業用水を行きわたらせ、土地改良によって泥炭地を農地に変え、不断の品種改良を重ねて、「ゆめぴりか」に代表される日本で一番おいしいお米が誕生したのです。この軌跡は「北海道という文明」といっていいと思います。一方、内国植民地と位置づけられた北海道の近代には、囚人労働、タコ部屋労働といった負の側面も大きく横たわっています。その両方が近代なのだと思います。つまり、近代という岩盤は、現代の私たちには、普段、土に覆われて隠れて見えないけれども北海道を学ぶことで、その岩盤を知ることができる気がしています。

新保　今の話につながるのですが、ここに持ってきましたのは暗渠（あんきょ）土管*3です。実は、教員に採用されて3年目のときに小学校4年生に暗渠土管を使った授業をしました。先ほど、北室さんが普段は隠れている土に覆われた岩盤を見る面白さを言われましたが、子どもに見えにくいけれど大切な役割を果たしているものを教えるのは教育の使命です。一見、自然そのものに見える畑の中には暗渠土管が入っていて、これが大事な役割を果たしていることを教えたことがあります。

当時、札幌市立八軒西小学校の教員で、この地域は昔、長芋の産地で“八軒もの”といって結構いい長芋がとれた場所ですし、農業試験場もありました。学校のそばに空き地があって、土管の破片みたいのがあったので、まさかと思いながら掘ってみたら、暗渠土管が出てきて、生徒たちも大感激でした。子どもたちは、畑には人々の工夫と知恵が詰まっていることを学んだのです。いまでもその子どもたちと交流があるのですが、未だに忘れられない経験のようです。

ですから様々な地域学があると思いますが、表面的に見えているものの裏側にある本質的なものが見えてくるとより面白いので、本質的なものを掘り起こすことも「ほっかいどう学」だと思います。

光と影を認識して将来を語る

関　「ほっかいどう学」に取り組むにあたって、気を付けなければならないと思う点が2、3あります。

一つは、昭和の初めに全道的に郷土教育がとても盛んになり、国を愛する心を育てるためにまず郷土愛を育てなければならないという考え方がありました。けれど結果として、あの時期の国家体制である国家主義を強化することに利用されてしまいました。しかも、あのころの郷土史教育は、視野が狭くて村自慢的な要素が強く、独善的な部分もあったと思います。

そのため戦後は、郷土史という言葉が敬遠され、地方史や地域史と言うようになりました。最近は、中央も一つの地域だということで、私は地域史という言葉を使っています。郷土を知る、郷土愛を育むことは大事なことですが、広い視野で見る必要があります。

もう一つは、北海道の本格的開拓が近代に始まったことから、日本の近代が抱えていた負の部分が、北海道にも沢山あります。例えば、アイヌ民族や文化も含めた先住民族問題も北海道開拓の負の部分の一つだと思います。アイヌの文化や社会を開拓の過程で壊さざ

＊2　パノプティコン
中央の監視塔から監獄のすべての部分が見えるように造られた円形もしくは放射状の刑務所施設。イギリスの思想家ベンサムの考案。ミシェル・フーコーが近代管理システムの起源として紹介したことで知られる。

＊3　暗渠土管
水田等の土中に埋設した素焼土管で、初期排水力が高く、短時間で多量の余剰水を土中から排除する。

身近なこと、興味に任せて自分で郷土史を探検してみると、北海道の一地域が日本全体、世界とつながっていることに気付かされ、楽しくなります。

関　秀志氏

るを得なかったわけですが、今は、その反省に立って、多様な民族が共生する時代になってきています。世界的にも、このように考えるようになってきたことは、人類の進歩だと思います。

また、北海道に移住した農民の多くは北海道で自作農になることを夢見て移住してきたのですが、結果的には半分ぐらいは自作農になれず、小作農として農業開拓を支えたわけです。小作農の米農家が、日常的に米を食べられるようになったのは戦後の農地改革後になります。

ですから、「ほっかいどう学」は北海道開拓の正の部分と負の部分、光の部分と影の部分を、きちっと認識して将来を語ることが必要だと思います。過去の郷土学習や郷土研究の反省も踏まえて、そのように考えています。

原　北海道の道路整備も、囚人道路といわれるように、樺戸（かばと）集治監をスタートに集治監の分館を造りながら、その間を結ぶように骨格となる道路網が形成されてきました。「ほっかいどう学」では、そのような負の部分も避けては通れません。

でも、最近「ゴールデンカムイ*4」という漫画が評判になっていて、アイヌ民族、樺戸集治監や網走刑務所など、まさに北海道の負の部分を舞台にしてストーリーが展開されています。おかげで月形町にある樺戸集治監をテーマとした「月形樺戸博物館」の来場者がとても増えていると聞いています。このような負の部分も直視していく雰囲気が社会的にもできつつあるように感じています。

「ほっかいどう学」の理解や普及を推進するための具体的な方策

原　さて、ここからは、「ほっかいどう学」をどのように広めていくか、普及させていくかという視点で、具体的方策等についてお話を伺えればと思います。

北室　私は書き手として「どう面白いか」ということを深掘りし、読者の方々と「こんなに面白い」という知的興奮を共有したいという思いで、取材をしています。そんな中で実感するのは、北海道は最初から国家によってプロジェクトが主導されてきたので、近代化に関する多くの資料が残されていることです。その記録性の高さを活かした画像の公開が一番だと考えています。

例えば、河川、道路、港湾、土地改良、農村整備等の各分野から10点ずつ、歴史的なベストショットを公開するだけでも大きなインパクトがあると思います。蛇行する石狩川の空撮や新篠津（しんしのつ）の泥炭地を手掘りしている写真等をまとめたサイトを作り、きちんとキャプションをつけ、どこからでもアクセスできる、そういった仕組みをつくってはいかがでしょうか。

新保　現在、小学校の１、２年生は生活科では主に身近なこと、自分たちの生活圏を学びます。また、社会科では日本の全体像を学ぶ学習が充実しています。このように、身近な生活圏と日本の学習は増えたのですが、結果として北海道の学習が相対的にすっぽり抜けている印象です。

ただ、現在の学校は、厚くなった教科書をより確実に教えることはもちろん、新たに英語やプログラミング学習等の増加で、非常に忙しい状況です。その中で、教員が北海道について学ぶ機会を増やしたくとも、余裕がないのが現状です。そこで戦略が必要となってきます。

１つ目はエドテック*5というITを活用した教育があり、例えば、教材として数分の動画を作成し、先生方が自由に使え、子どもたちも自宅で閲覧できれば、忙しくても授業に取り込みやすくなります。

＊４　ゴールデンカムイ
北海道出身の漫画家、野田サトルによる明治末期の北海道・樺太を舞台にした、金塊をめぐるサバイバルバトル漫画。『週刊ヤングジャンプ』（集英社）に連載中。

＊５　エドテック（EdTech）
Education×Technology（教育×テクノロジー）の造語。教育とテクノロジーを融合させ新しいイノベーションを起こすビジネス領域を指します。具体的にはブラウザ上で完結してインタラクティブにプログラミングの勉強ができ、オンライン動画を見て勉強するなどがある。

原　文宏 氏

これまでの、児童に社会基盤整備の大切さを伝える活動をしてきた経験を踏まえ、あらためて「ほっかいどう学」として戦略性を持って取り組んでいきたい。

２つ目は教員養成課程の中で、北海道に関する単位を充実させたり、教員の10年ごとの教員免許更新の時、研修で「ほっかいどう学」を選択できるようにしたらよいと思います。

３つ目は、私は小学校・中学校の社会科教員で構成する研究会に参加してきましたので、現役の仲間と共に、教材作りで苦労している現場の先生を支援すること等を考えています。

地域の博物館や資料館の役割

関　私が参加しております北海道史研究協議会*6の主な会員も教員でしたが、現在は現役教員がほとんどいません。理由は、カリキュラムのせいもありますが、教員が多忙なためです。

多忙な中で、教員が地域の歴史や地理、文化のことを知る方法の一つは、地域の博物館や郷土資料館だと思いますので、そことコンタクトしやすい環境づくりと、個々の先生方が参加している地理や歴史の研究団体等と連携していく必要があると思います。

原　博物館・郷土資料館が地域社会の中で、どの程度活かされているか把握していませんが、以前、英国に行ったとき博物館・美術館はほぼ無料で、教師が生徒を引率して博物館で授業を行っている光景を見たことがあります。博物館側も小学生用の教育プログラムをもっていました。地域の博物館、郷土史料館は「ほっかいどう学」の展開にも人材を含めて重要な拠点だと思います。

関　「北海道開拓の村」も開設当初は学校単位のバスでの来場がありましたが、現在は様々な制約で難しい状況です。

現状ですと、学校単位ではなく、博物館の事業として独自のカリキュラムを作成し、希望者を募って北海道の開拓時代の暮らしなどを子どもたちに学ばせ体験させることが現実的だと思います。

大切な「面白さ」と「物語性」

新保　戦略に「面白さ」が必要だと考えています。先日、長崎出張で軍艦島を見て来ました。軍艦島へのツアー会社がいくつかありましたが、私が利用したツアーは最新のITとVR*7を活用した非常に洗練された仕組みでした。船に乗って軍艦島に向かったのですが、台風の影響で桟橋が壊れていたため上陸ができませんでした。でも、船内の説明がとても面白いものでした。北海道には、良い素材がたくさんあるので、もう少し緻密な面白い表現方法が必要だと感じています。

原　「ほっかいどう学」の普及と理解促進のため、「ほっかいどう学」をテーマにする洗練された観光プログラムづくりは重要なポイントかもしれませんね。

北室　北海道開発局でもインフラツーリズムが盛んに行われていますが、北海道は語り継ぎたいインフラの宝庫です。例えば、苫小牧港は、砂地の海岸をもつ港はいずれ砂に埋まってしまうという当時の常識をくつがえす、世界初の砂浜掘り込み港湾で、この成功が新潟、秋田などの工業港湾ができるきっかけとなった新時代を開くほどの画期的な港湾なのです。不可能といわれた砂浜での港湾建設を可能にしたのが、漂砂の調査をはじめとする綿密かつ地道な調査や観測でした。特に、漂砂の調査ではラジオアイソトープ（放射性同位元素）が使われたのです。ガラスにアイソトープを固定して人工砂をつくり、この小さな人工砂に放射線による「標識」を付けて、海底で砂がどう動くのかを地道に計測したのです。この観測と模型実験の結果により砂に埋設しない港が建設され、放射能の平和利用に関してはジュネーブの会議で称賛されもしました。このような技術史を物語性をもって共有していくことは、地域の誇りにもつながるのではないでしょうか。

原　現在のインフラツーリズムは、通常行けない場所へ行けることが強調されているように思います。例え

＊６　**北海道史研究協議会**
北海道地域史研究のため会員相互の連結提携をはかることを目的に、昭和41年に創立された団体。事務局を札幌市に置いている。

＊７　**VR**
Virtual Reality（バーチャル・リアリティー）の略で「仮想現実」と言われ、仮想空間上で目の前にある現実とは違う仮想現実を体験できる。

ば、室蘭の白鳥大橋の主塔の上に登れるとか、ダムの点検トンネルに入れる等。もちろん、このことは大きな魅力ではありますが、そこだけではもったいないと思います。もっと「ほっかいどう学」的な要素を持ったインフラツーリズムのアプローチをしていかなければならないと思います。

息の長い取組に向けて

北室　今、ダークツーリズム*8が世界的に盛んです。例えば、フランス、パリの有名人のお墓が多数ある墓地、北海道でいえば炭鉱遺産や博物館網走監獄、月形樺戸博物館、雨竜（うりゅう）ダム等も同種のツーリズムの対象になると思います。21世紀は負の歴史をタブー視するのではなく、ダークツーリズムを通して地域、ひいては人間を理解していこうとしており、そういった視点も非常に面白いと考えます。

新保　学校教育には、様々な制約の中で、簡単に「ほっかいどう学」が入り込むことはできませんが、道内の学校にある図書館に北海道史を描いた本、漫画でも良いので、10冊程度でもあれば良いと思います。「島義勇（しまよしたけ）」の漫画も出版されています。やはり、面白さが大切で、色んなメディアを通して北海道の魅力を語っていくことが大事です。

　また、今、NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムのWebサイトは立ち上がっているのですが、スタートしたばかりで内容の充実もこれからです。どのようにすべきか検討中ですが、「ほっかいどう学」の普及、拡大にとって最も重要なツールの一つになると思っています。

原　活発なご議論、ありがとうございました。私にも「ほっかいどう学」の形が少し見えてきましたし、具体的な取組にも多くの示唆をいただきました。そして「ほっかいどう学」が北海道の地域づくりの基盤、岩盤であることに確信が持てました。これから長い取組になると思います。皆様には引き続き「ほっかいどう学」へのご尽力をお願いして、座談会を終了したいと思います。

　今日は貴重なお話をお聞かせいただき、ありがとうございました。

＊8　ダークツーリズム
学問的な定義は定まっていないようだが、戦争跡、自然災害の被災地、事故現場、大量虐殺等のあった場所を対象に、そこで起きた出来事を継承するために行うツーリズムのこと。

プロフィール（五十音順）

北室　かず子（きたむろ　かずこ）
1962年徳島県出身。筑波大学第二学群比較文化学類卒業後、婦人画報社（現・ハースト婦人画報社）に入社し、女性月刊誌の編集に携わる。91年北海道に移住し、JR北海道車内広報誌『THE JR Hokkaido』特集を29年にわたり企画・取材・執筆。著書：『赤れんが庁舎物語』（(一財)北海道北方博物館交流協会）など多数。

新保　元康（しんぼ　もとやす）
1958年小樽市出身。82年北海道教育大学札幌分校卒業。札幌市立小学校、北海道教育大学附属札幌小学校勤務を経たのち、市内小学校４校で校長を務めた。北海道社会科教育連盟や北海道雪プロジェクト等の民間教育団体にも長年参画し、地域教材を多数開発。また文部科学省の情報化推進事業の各種委員も歴任。2019年屯田小学校で定年退職。８月よりNPO理事長としての活動を本格化させている。

関　秀志（せき　ひでし）
1936年苫前町出身。59年北海道大学卒業後、北海道羽幌高等学校教諭を経て、69年北海道開拓記念館（現北海道博物館）開設のため北海道庁に転勤。開拓の村整備室長、学芸部長などを歴任し、97年定年退職。研究分野は北海道近現代史（移住・開拓史、地域史、民具学など）。地名から札幌の歴史をひも解く『札幌の地名がわかる本』（亜璃西社）では歴史学のエキスパートを束ねて編著者を務め、同書は大きな反響を呼んでいる。

原　文宏（はら　ふみひろ）
1955年赤平市出身。北海学園大学工学部を卒業後、建設コンサルタンツ会社勤務を経て（一社）北海道開発技術センターに入社。交通計画や地域づくりのシンクタンク職員として調査研究に従事するだけでなく、社会実装の取組として（一社）シーニックバイウェイ支援センター、（一社）日本モビリティマネジメント会議、NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム等の設立に参加、現在も、それらの活動に主要な役割を担っている。

シリーズ「ほっかいどう学考」

第１回　2018年２月号　国土交通省北海道開発局開発計画課
「新たな北海道総合開発計画の推進
～「ほっかいどう学」の更なる展開に向けて～」
第２回　2018年４月号　新保　元康
「ほっかいどう学の可能性と必要性」
第３回　2018年６月号　谷口　綾子
「北海道を離れ、北海道を想う」
第４回　2018年８月号　原　文宏
「初等教育（小学校）における社会資本整備の教材化に関わって」
第５回　2018年10月号　高橋　庸哉
「雪の学びをすべての教室に」
第６回　2019年４月号　今　尚之
「産業遺産の保存・利活用と生涯学習」
第７回　2019年７月号　北室　かず子
「『北海道』という文明のダイナミズムを考える」
第８回　2019年10月号　関　秀志
「開拓の歴史は北海道の宝」